

佐賀市 27 歴史探訪

こうごいし なの 神籠石の謎

西日本各地に点在する「神籠石」の一つである帯隈山神籠石(久保泉町川久保に所在し、一部は神埼町にまたがっています)は、脊振山南麓から派生した帯隈山を中心に幾つかの山(天童山、鳥越山、清兵衛山、桃山)と谷を取り込みながら、方形に切り出した花こう岩を列状に並べ、総延長2.4kmにわたって環状に巡らした巨大な遺跡です。昭和16(1941)年に発見され、昭和26(1951)年に国史跡として指定を受けました。

この「神籠石」とは、いつ、誰が、何のために造ったものなのでしょうか。

「神籠石」という名称は、その名の通り、「神が籠る石」として、列石で囲まれた内部を神聖な場所と考えたことに由来しており、学界に初めて紹介されたのは明治31(1898)年のことです。その神域説の発表後すぐに山城説も唱えられ、大正、昭和期に至ってもその性格については論争が絶えませんでした。しかし、昭和30年代から各地で行われた発掘調査により、列石が土塁の基礎の一部であることが判明したため、現在では山城説が有力となっています。

帯隈山神籠石の発掘調査は昭和39年から平成11年までに4回が行われました。その結果、山城説を裏付けるように列石・土塁・柵列などが確認されただけでなく、神籠石の築造年代は6世紀末以降であるとの重要な知見も得られています。

さて、築造目的や時期などについては、これまでの各地の発掘調査や文献研究の成果によって、天智天皇4(665)年に築城されたと考えられる福岡県の大野城や佐賀県の基肄城などの山城よりも以前に、対外防衛を目的として国家主導で造ったという説が主流となっています。ただ、資料そのものがまだ少ないこともあって、決定的な手掛かりは今のところ得られておらず、定説化するまでには至っていません。

「神籠石」の全容が明らかになるまでには、まだまだ時間がかかりそうです。



▲帯隈山を望む



▲平成11年度に発見された神籠石列石

一口メモ

・古代の山城や神籠石の築造には、7世紀頃の唐・新羅・百濟・日本を取り巻く紛争状況が深く関係しているのではないかと多くの研究者が考えています。また『日本書紀』の中に書かれている当時の情勢(白村江の戦い(663年)など)や防備に関する記事は、神籠石研究上非常に重要視されています。

・帯隈山神籠石の南域には、国天然記念物である「エヒメアヤメ」の自生地があります。毎年桜の開花の頃に、小さいながらも紫色の可憐な花を咲かせます。開花時期には地元の方々による「エヒメアヤメ祭り」も開催されますので、神籠石の見学とあわせて一度訪ねてみてはいかがでしょうか。

